

位がみられ、剖検にて同部位に相当する部位に壁の非肥大部分がみられた。右室圧 84 mmHg。

結語：1. 右室への Tl の取り込みの増大は肥大程度を反映しうる。2. SPECT 短軸像による心室中隔の形状は右室圧を推測しうる。3. SPECT は右室の拡張または肥大による右室心筋障害を描出しうる可能性がある。

50. ^{111}In -抗ミオシン心筋シンチグラフィと $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -ピロリン酸心筋シンチグラフィの不一致例

川本日出雄 成瀬 均 森田 雅人
山本 寿郎 板野 緑子 福武 尚重
岩崎 忠昭 (兵庫医大・一内)
福地 稔 (同・核)

目的：急性心筋梗塞 (AMI) に対し $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -ピロリン酸 (PYP) と ^{111}In -抗ミオシンモノクローナル抗体-Fab (InAM) とを、(1) 取り込みの濃さ (程度)、(2) 取り込みの大きさ、(3) 取り込みの部位、(4) 取り込みのパターンで視覚的に判定しその不一致例について検討した。

対象：平成元年5月から10月までに当院に入院し PYP, InAM を行った AMI 17 例で、AMI の診断は 30 分以上続く胸痛、心電図で ST 上昇、異常 Q 波の出現、心筋逸脱酵素の上昇を認めたものとした。男性 14、女性 3 例、平均年齢 56 歳で 1 例を除いては急性期に冠動脈造影を行いそのうちの完全閉塞 14 例にインターベンションを施行し再開通をおこなった。2 例は自然再開通であった。16 例は初回梗塞であった。

方法：PYP は AMI 発症 2-8 日、平均 5 日目に 740 MBqiv し 3 時間後に撮像、InAM は発症後 8-36 日、平均 15 日目に末標識 AM で皮内テストにて陰性確認後、74 MBq (2 mCi) し 48 時間後に撮像した。濃さは PYP は Parkey score、InAM は planer 正面像で、0：取り込みなし、1：骨髄より薄い、2：骨髄より濃いが肝より薄い、3：肝と同じかそれより濃い、の 4 度に score 化した。大きさ、部位は SPECT 像にて、取り込みパターンは planer 像で視覚的に比較した。

結果：17 例全例に取り込みがみられ濃さの不一致は 2 例に認め PYP で濃い傾向にあった。大きさの不一致は 5 例に認め 4 例は PYP で大きかった。部位の不一致は 2 例に認めた。取り込みパターンの不一致は 3 例に認めた。これらの不一致例は PYP, InAM での集積機序の違いによるところが大きいのと考えられ、さらに急性期

の reperfusion の影響、撮像時期のずれも関与しているものと思われた。

51. ^{111}In -抗ミオシン心筋シンチグラフィと ^{201}Tl 心筋シンチグラフィの不一致例——急性心筋梗塞における検討——

森田 雅人 成瀬 均 板野 緑子
川本日出雄 山本 寿郎 福武 尚重
岩崎 忠昭 (兵庫医大・一内)
福地 稔 (同・核)

目的： ^{111}In -抗ミオシンシンチグラフィ (InAM) の急性心筋梗塞に対する広がり、 ^{201}Tl 心筋シンチ (Tl) の灌流低下部位と比較し不一致例について検討する。

対象：急性心筋梗塞患者 17 例、LAD 病変例 10 例、RCA 病変例 3 例、LCX 病変例 4 例。

方法：Tl は発症後平均 5 日、InAM は平均 8 日、心プールシンチは平均 30 日目に施行。Tl の欠損および、InAM の集積の広がり、SPECT 像を 9 segment に分け陽性部分の合計を extent score として評価。また overlap の定義として、InAM の集積部分が Tl にて完全欠損を示さない部分が 1 segment 以上ある例を overlap 例とした。冠動脈の狭窄度は AHA 分類、側副血行路は Rentrop 分類にて評価した。また 1 か月後の overlap 部の壁運動は心エコーにて視覚的に評価した。

結果：Tl の欠損の広がり、InAM の集積の広がり、 $r=0.73$, $p<0.01$, InAM の集積の広がり、心プールシンチによる LVEF は $r=-0.60$, $p<0.05$ で関連した。overlap 例は 17 例中 8 例に認め、そのうちの 6 例が梗塞中心部の overlap 例、2 例が梗塞周辺部の overlap 例であった。overlap 部の壁運動は 8 例中 5 例が hypokinesis、2 例が akinesis、1 例が normokinesis と hypokinesis を示す症例が多かった。また同部位の壁厚は正常範囲の症例が多かった。overlap 例では急性期の再開通時間、側副血行路の発達程度には一定の傾向は認められなかった。

考察：InAM と Tl の overlap 部の壁運動は、hypokinesis の症例が多く、また壁厚も保たれている症例が多いため冠動脈再開通あるいは側副側副血行路により salvage された部分とも考えられ、さらに長期の follow が必要である。